

# 琉球病院 Monthly



独立行政法人  
国立病院機構 琉球病院  
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.98  
2021. March

発行者 琉球病院事務部長  
花木 成信

## 基本理念 この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

### 精神科病院クラスター支援活動報告

看護師長 奥浜 伸一

令和3年1月31日沖縄県内精神科病院にて新型コロナウイルスクラスター発生の一報を受け、2月1日～2月24日の間、沖縄県 DPAT 調整本部指示のもと大鶴副院長(活動期間:2月5日～2月26日)と行った支援活動について報告します。

精神科病院では患者さんにマスク着用の協力が得られにくい上、消毒液の設置が難しいことから、患者さんだけでなく職員にも感染が広がり易い傾向にあります。今回、支援に入った病院においても多数の職員が感染し、看護師の人員不足が大きな問題となりました。私は大鶴副院長と共に院内対策本部で活動し、看護統括として県庁の支援班と連携しながら、看護師の派遣調整や現場マネジメントの役割を担いました。

また、クラスター病棟内では感染廃棄物処理や清浄化作業を行いました。私自身が感染してしまわぬよう、感染管理認定看護師に感染予防具着脱の指導を受けながら活動を行いました。この経験は感染予防具着脱技術だけでなく、基本的な感染対策の考え方を学ぶことができ、私にとって貴重な財産となりました。

今回の支援を通じて改めて感じたことは、感染症は正しい知識と技術を身に着け、細かい対策を徹底して行わなければ患者さんや家族を守ることができないということでした。私たち医療従事者は当たり前のことを当たり前に実践する「プロフェッショナル」として、新型コロナウイルスだけではなく、全ての感染症から患者さんを守るため、普段から感染対策に取り組み続けなければなりません。支援前の私はその心構えが十分ではありませんでした。今後はこの学びを院内研修だけではなく教育研修会などを通じて他の精神科医療機関と共有していきたいと思っております。

最後になりますが今回、支援に入らせて頂いた病院関係者の皆様が、1日も早く穏やかな日常生活を取り戻せることを心から願っています。



#### ● 地域医療連携室だより

琉球病院では、受診相談や地域、行政、他医療機関からの窓口として地域医療連携室を設置しております。一般精神をはじめ、アルコール依存症を含むアディクション全般、治療抵抗性統合失調症治療薬で効果のあるクロザピンによる治療、認知症、児童思春期外来といった様々な疾患をお受けできる診療体制を整えております。また、中北部圏域を中心とした地域の皆様によりよい質の医療を提供し、適切な対応ができるよう充実した取り組みを行い、地域のニーズに応えられるよう日々努力していきたいと思っております。初診はじめ、受診については予約制となっております。

ご相談はお気軽に地域連医療携室までお問い合わせください。

#### 院長

ふくじ やすひで  
福 治 康 秀



1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。日本病院・地域精神医学会理事。琉球大学医学部 臨床教授。

#### 診療科

- ・一般精神科
- ・こども心療科
- ・物忘れ外来
- ・アルコール依存症等外来

#### 病床数

416床

- ・精神 151床  
(一般精神・クロザピン専門・精神科救急)
- ・認知症治療専門 56床
- ・アルコール依存症 54床
- ・児童思春期ユニット 4床
- ・重症心身障がい 90床
- ・医療観察法 37床



#### 路線バス

那覇BS(下り)または名護BS(上り)より  
沖縄バス[77番名護東線]浜田バス停  
下車徒歩3分

#### 自動車

那覇市から40分沖縄自動車道金武  
インターから名護向け5分

#### お問い合わせ

時間 8:30 ~ 17:15  
(土・日・祝日・年末年始以外)  
TEL 098-968-2133(代)  
内線 231・234

#### 地域医療連携室(直通)

TEL 098-968-3550  
FAX 098-968-7370

## 治療抵抗性精神疾患への医療

医師 木田直也



### クロザピンの治療状況

治療抵抗性統合失調症の患者様に対して、当院では2010年2月からクロザピン（CLZ）治療を開始し、全症例は延べ345例になりました。2021年2月のCLZ導入は2例で、いずれも他の病院からご紹介をいただきました入院中の患者様でした。CLZ治療前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために隔離や身体拘束が必要な患者様も多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動も消失、もしくは軽減し、隔離や身体拘束は、ほとんどの症例で解除できています。週に3回のCLZ専門外来も行っていますので、患者様のご紹介をお願いいたします。当院でのCLZ治療や沖縄県での地域連携の実際については、ノバルティスファーマ社の医療関係者向けサイトのクロザリル/クロザリルのご使用にあたって(<https://drs-net.novartis.co.jp/dr/product/clozaril/guide/>)でも動画が公開されていますので、ご参照ください。

## こども心療科

心理療法士 仲間 信也

県から委託を受けている「子どもの心の診療ネットワーク事業」では、子どもの心の健やかな育ちを支える体制整備に向けた取り組みを進めており、社会資源が限られている離島の支援にも取り組んでいます。今年度は、主に久米島と宮古島で活動を展開しました。

久米島では、島内の支援体制整備に向けた行政との情報交換会に参加するとともに、福祉・教育機関職員を対象とした研修会を開催しました。研修会には、保育園、幼稚園の先生や小学校の支援員の方を中心に、多数の方に参加して頂きました。

宮古島では、昨年度に引き続き、圏域自立支援連絡会議（療育教育部会）にオブザーバー参加し、地域課題の集約と課題解決に向けた取り組みについて協議を重ねてきました。課題の1つに支援者のスキルアップがあり、当院は支援者を対象とした研修の一部を担わせて頂くことになりました。次年度は、特に研修ニーズの高い「心が育つプロセス（アタッチメントとマルトリートメント）」「保護者支援」をテーマに講義する計画となっています。離島への支援機会は限られているため、効果的・効率的な取り組みができるよう、今後も地元の支援者と協議しながら、より良い支援の形を模索していきたいと考えています。

## 認知症医療

東Ⅲ病棟棟師長 平良 恵

近年では、高齢でなくても若年性認知症にかかる方も増えてきました。多くの病気と同様に、認知症も早期発見が非常に大切です。認知症の診断には、採血や心電図などの身体検査、脳波測定やCT、MRI検査などの脳の検査、単語の暗記や計算などの記憶に関するテストが必要となります。認知症は発見が早ければ早いほど、その進行を遅らせることが可能といわれています。認知症に関する正しい知識を得て、社会資源やサービスをうまく利用しながら、無理をせずに長く介護が続けられる環境を整えることも重要です。近隣の地域包括支援センターで、認知症サポートに関する情報を得ることができます。また、認知症のような症状に見えても、他の病気からくる症状といったケースもあります。認知症かな？と思うような症状があれば、病院で医師の診断を受けるようにしましょう。当院での検査や治療を希望される方は、地域連携室までお問い合わせください。

## 重症心身障がい医療

療育指導室長 金城 安樹

当院の重症心身障がい病棟は病棟別に、行動障害への対応、身体的なケアの機能分化をはかっています。強度行動障害により対応に苦慮されている方の相談が多く、在宅や施設から当院への短期入院を利用して頂いています。今年度は新規入院7名、退院9名でした。概ね3ヶ月程の入院期間により、日中活動及び生活リズムの改善や服薬調整をとおして行動障害改善へと取り組んでいます。また、身体的ケアが主となる病棟では、利用者の高齢化による機能低下、嚥下機能低下による医療的治療や処置を必要とする利用者の増加（吸引・酸素使用）、介護・看護量の更なる増加等が予測されており、それらに対応していく事が今後の課題となっています。

## アルコール・薬物依存医療

北Ⅰ病棟師長 長 祥子

3月13日、14日に九州アルコール関連問題学会がありました。今回はアルコール・薬物だけでなく、ギャンブルやネット・ゲームについても各施設の取り組みが紹介されていました。アルコール・薬物・ギャンブルについては身体的・精神的・社会的に大きく影響されるため基本的にはやめることを目標にしていますが、患者さんの回復の段階に応じてまずは量を減らす・回数を減らすなど害を少なくする治療もされています。ネット・ゲームについては、このネット社会の中で完全にやめることは困難ということもあり「節ネット」という言葉が使われていました。依存症は、依存対象のコントロールができなくなる病気です。コントロールできないものをコントロールしようとするは大変難しいと思います。ですが、依存しやすいモノやコトが身近にある世の中で完全にやめる決断をすることも難しいと思います。依存問題を抱えている方が少しでも健康に生活できるよう多職種で支援していきます。治療を希望される方は地域連携室までご相談ください。

## 包括的地域精神医療

訪問看護師長 嘉手苺 美智留

3月に入り寒さもすっかり和らいで、過ごしやすい季節となりました。しかし、3月は職員の退職や転勤、異動と何となくそわそわする時期でもあります。特に訪問看護においては、数年受け持ち看護師として関わってきた看護師が定年を迎えることを利用者に話すとき揺動が見られたり、不安な表情や思いをぶつけてきたりもします。毎回受け持ち看護師が訪問する訳ではないのですが、利用者にとっては身近な相談役として受け持ち看護師の役割や存在は大きいようです。職員の異動に伴う受け持ち看護師の変更があっても、利用者に安心してもらえるような信頼関係の構築に努められるようにしていきたいと考えています。

## 臨床研究部活動状況

心理療法士 我喜屋良行 諸見優子

### 『ADHDペアレントトレーニング 複数機関実施における無作為比較試験』 OISTとの共同研究の進捗状況報告②

ADHDの治療について、薬物療法と行動療法を組み合わせた包括的治療が最も効果的であることは報告されておりますが、日本においては薬物療法に関する研究が盛んであるのに対し、心理社会的支援に関する無作為比較試験は極めて少ないのが現状です。当院は2019年7月よりOIST（沖縄科学技術大学院大学）と「ADHDペアレントトレーニング複数機関実施における無作為比較試験（RCT）」の共同研究を進めております。

2020年3月時点で2グループ16名の保護者に参加いただきました。2021年はCOVID-19の影響により、プログラム中断、延期が相次いだものの、2グループ13名の保護者に参加いただきました。保護者からは、このプログラムに参加することで、「子どものイライラが減った」「子どもに落ち着いて接することができる」「エンパワーメントされた」との意見が多く上がっております。今年度も共同研究を継続していきます。